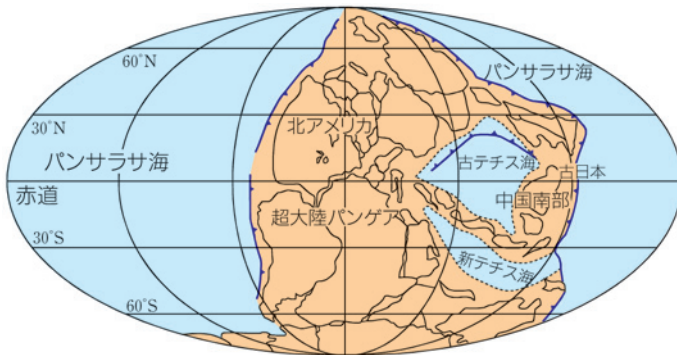


とまった岩体としては日本最古のものである。それより小さなものとして、岐阜県上麻生<sup>かみあそう</sup>の中生代ジュラ紀の礫岩に多数含まれる約 18 億年前(原生代前期)の片麻岩の礫(直径数十 cm)がある。これらの礫は古い大陸地殻が地表で削られ、ジュラ紀の日本の海溝まで運ばれて堆積したものであり、大陸との密接な関係を示している。

## B 日本列島の成長 (古生代～古第三紀)

古生代前半(約 5 億年前)には、中国南部の大陸塊の太平洋側に新しくプレートの沈み込み境界が生まれた(図 10 (b))。

●古生代～中生代の付加体と変成された付加体● 古生代後半から中生代にかけて、海洋プレートが活発に沈み込んだために、海溝では次々に付加体が形成された(図 10 (c))。最古の付加体は徳島県や京都府のおおえやまに産するオルドビス紀の低温高圧型変成岩(原岩は変成作用直前に形成された付加体)である。約 2 億 5000 万年前のペルム紀末ごろや約 1 億 6000 万年前のジュラ紀中ごろには大量の付加体がつくられ、それらは、それぞれ西南日本の秋吉帯や美濃・丹波帯に広く分布している。一方、海溝の陸側には火山列が出現し、その地下では巨大な花こう岩の岩体がつくられ、それらは大陸縁に新たな大陸地殻物質を追加した。日本で知られている最古の花こう岩は、熊本県や茨城県に産する約 5 億年前のものである。



▲図 11 古生代と中生代の境界ごろの古地理図

超大陸パンゲアの東縁の低緯度地域に当時の日本を含む中国南部の大陸塊が位置していた。